



Title	彙報
Author(s)	
Citation	懷徳. 1972, 42, p. 85-91
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90500
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

彙報

(懷德堂記念會)

○昭和四十五年十月八日北澤理事理事長就任。

○同日 堀田庄三(住銀會長) 上野淳一(朝日新聞社主) 木村英一(追手門大學教授)の三氏理事就任。

○記念祭典 十月十七日(土) 東區北濱三丁目本會(適藝内)に於て、午後一時半より記念祭典執行、終つて、大阪大學助教 授堀田 修氏の「平野の郷學含翠堂について」と題する講演があつた。

○秋季講座 十月十九日(月)より二十四日(土)まで、本會及び大阪大學文學部主催、朝日新聞社後援で、大阪大學松下會館四階會議室に於て、毎日午後六時半より八時まで第四十一回懷德堂講座開催、聽講者延三百五十二人。

演題と講師

古代土器にみる美と技術

神戸商船大學教授 北野耕平先生

古代畿内の歸化人と文化

大阪大學教授 井上 薫先生

運慶の藝術

神戸大學教授 毛利 久先生

中世宋學の問題點

神戸女學院大學教授 和島芳男先生

江戸時代の家族慣行 大阪市立大學教授 平山敏治郎先生

歌舞伎と操り

大阪大學教授 時野谷 勝先生

○理事長北澤敬二郎氏 十月二十五日逝去。昭和三十七年四月理事に就任以來、本會のため非常に盡力され、四十五年十月理事長に就任、いざこれからという時であつただけに、眞に痛惜に堪えない、謹んで哀悼の意を表する。

○昭和四十六年二月四日 理事堀田庄三氏理事長就任。

○三月三十一日 山田理事辭任。

○四月一日前田嘉明氏(大阪大學文學部長)理事就任。

○春季講座 五月二十四日(月)より二十九日(土)まで、本會及び大阪大學文學部主催、朝日新聞社後援で、大阪大學松下會館四階會議室に於て、毎日午後六時半より八時まで、第四十二回懷德堂春季講座開催、聽講者延三百二十人。

演題と講師

子路の事蹟

追手門學院大學教授 木村英一先生

尺牘の書

大阪外大教授 外山重治先生

不平の文學

京大教授 田中謙二先生

朱子學について

帝塚山大教授 木南卓一先生

西鶴のおもしろさ發見

阪大助教授 信多純一先生

商君書について

阪大教授 清水 潔先生

○秋季講座 十月四日(月)より九日(土)まで、本會及び大阪大學文學部主催、朝日新聞社後援で、大阪大學松下會館四階會議室に於て、毎日午後六時半より八時まで、第四十三回懷德

堂講座開催、聴講者延四百三十二人。

演題と講師

萬葉以前

奈良女大教授 本田義憲先生

落窪物語の本について

阪大教授 柿本 獎先生

説話と「かたり」

京大教授 阪倉篤義先生

能の作者と世阿彌

天理大教授 北川忠彦先生

現代語の話

阪大助教授 宮地 裕先生

大阪と雑俳

滋賀大教授 宮田正信先生

○記念祭典 十月十六日(土) 東區北濱三丁目本會(適塾内)に於て、午後一時半より記念祭典執行、終つて大阪大學教授森三樹三郎氏の「儒教と共產主義」と題する講演があつた。

○昭和四十七年三月三十一日前田理事辭任。

○四月一日 田中 裕氏(大阪大學文學部長) 理事就任。

○春季講座 五月二十二日(月)より二十七日まで、本會及び大阪大學文學部主催、朝日新聞社後援で、大阪大學松下會館四階會議室に於て、毎日午後六時半より八時まで、第四十四回懷德堂春季講座開催、聴講者延三百十五人。

演題と講師

會子について

追手門學院大學教授 木村 英一先生

經と權―原理と現實

大阪大學教授 森三樹三郎先生

杜甫における詩人としての自覺

大阪大學教授 黒川 洋一先生

儒教における國家と個人 大阪大學教授 日原 利國先生
山片蟠桃の「夢の代」 近畿大學教授 末中 哲夫先生
命名と漢字 大阪大學教授 池上 禎造先生
―日本人の文字意識から

岡山紀行

(堂友會四十六年度夏季見學旅行)

案じていた空も丁度、梅雨期の中休みか、雨具の必要もなく晴れ出した。

午前八時辯天町驛に集合、日交バス二臺を連ねての岡山近郊、吉備方面への見學旅行。

なつかしい紫の旗を持つて幹事の方達が、要所々々で集合場所へと案内して下さる、いつもの事乍ら萬事行きとどいた事に感謝する。

バスは一路阪神高速を西へ、高砂、備前の町をとおり西大寺南方の丘、上寺山の餘慶寺へ到着、備前天臺の中心である。非公開の本尊、藥師如來は今回の講師、齋藤先生の特別の御盡力で拜觀させて頂く、美事な彫刻である、その流れる線の美しさと崇高さにまず心をうたれる。

桃太郎の昔話に出てくる笹ヶ瀬川のほとり古い歴史と文化の吉備路を走る、老松の並木美しい境内を吉備津神社に參詣、齋藤先生の明解、懇切な説明を承る、拜殿の莊重、優美さに目を眩り、比翼入母屋造りの屋根の美しさに感嘆の聲をあげる、本殿、拜殿の横にまわる。龜腹といわれる基壇を用いて山の傾斜

を水平にしている構造の智慧や、見あげる双翼の空間に描かれた構圖の何とすばらしい事か。千木が一きわひかる。

廻廊の壯觀は又格別、自然の山のスロープを利用して美しい曲線をえがきつつ三百米餘りもつづく。そのつきるところお金殿がある。上田秋成の「兩月物語」に世にも珍らしい行事「鳴る金の神事」と伝えられているお金殿。

今はまだ占う者もなく閉ざされている、うすぐらい中をのぞいてみた。古い大きな釜が一基、ぽつんと置かれている。うらの靈をなぐさめるために始まったと伝えられる占神事がこで行なわれたのであらう、この釜が鳴り出してその年の吉凶をうらなつたのであらう原始的な神事を一瞬思いうかべてみた。

中世豪族の臺所を見のおもいがする。

宮内は神社の門前町として江戸時代に大繁昌したとのこと、歌舞音曲が許され芝居の役者が度々やって來ては興行を行なつた等の説明をきく。

つづいて高梁川の流れをみつつ井山寶福寺に到着、書聖雪舟が、涙でねずみの繪をかいたという傳説のある有名な寺院である。

臨濟宗の寺院で七堂伽藍を完全に備えた立派なお寺である。この山を井山と呼ぶ様になつた千尺井戸の由緒あるいわれをきく。

古鐘樓が残っている、國の重要文化財に、指定されている三重塔は夕ぐれの光の中に美しく浮かぶ。夏ぜみが鳴きはじまる、すぐ近くの總社市國民宿舍雪舟莊へと向う、一部の方は、寶福

寺にと分宿、寶福寺へ泊られた會員は禪の修業と坐禪會に加わられた由。

かなりきびしい參禪にも得がたい心の糧とうけとめて行をしたと後刻うかがう。

翌朝八時すぎ宿舎を出て高松最上稻荷へとむかう、總門仁王門は、總みかげ石造りの、立派なもの、朝風に最上位稻荷の赤い旗が境内にはためく。

備前焼の窯元見學、土と炎の藝術といわれる優雅な味の備前焼、齋藤先生の御厚意で木村興樂園を見學、上り窯といわれる窯の様式、古墳時代の須惠器を源流とする古窯のひとつときく。その陶土、選擇、ロクロ挽き無釉陶器の素朴な傳統を守りつづけて堅牢で美しい、陶器づくり等、技術面までもくわしく説明して下さる。作業場ではいま出來あがつた生地のぬれいろの瓶子をみつつこの焼上りを想像したことであつた。

同所にて各々おみやげを購入、茶碗に、花器にとなかなか賑やか。

今回の見學の主とも云える閑谷學校へとバスは走る、日本で初めての庶民教育のために、開いた學校である。まづ第一に目につくのはその周圍にめぐられた石塀、唐様を眞似たその石積み、かまぼこ型の石塀に瞪る。

擇びぬかれた建築材に、また屋根瓦はすべて備前焼で葺かれている。その瓦の一つ一つに各々の意味をもたせて造られているという。學校の方が、建物、沿革について、いろいろ説明して下さる。講堂の床板が鏡の様に光っている、花頭窓の明障子

感謝したことであった。

(澤 美枝記)

が開け放たれ、講室内に、みどりの風が、ふきぬける。黒くひかり磨かれた圓柱が拭板敷に影をうつす。「克明德」の三字額が掲げられ、壁書一板が、目につく。ケヤキの木に、學校經營の憲章ともいえる「定」が墨書されている。

習藝齋、飲室、とみせて頂く、飲室の爐ぶちにはこの室の火氣使用注意が刻み込まれ、當時より防災等も徹底して、教え込まれたのだろう。小齋、文庫と廻る、聖廟「大成殿」を拜す。聖廟外門へ通じる石段の兩脇に、楷の大樹が印象的だ。中國孔子林の實を育て、移植したという。秋になれば美事に紅葉するという。ここで記念撮影。

校門、鶴鳴門も中國調である、屋根にシャチホコが見える。ここから南へ百五十米餘り溪流に沿って進む、二つの水が落ち合うところに黃葉亭がある、小さなあづまやである。頼山陽が、數日を、滞在し「黃葉亭記」を書いたという。

藤原定家の歌から命名したということが黃葉亭記にあると説明がある、水が美しい。

限りなくすばらしいこの閑谷學校の見學を終えてようやく歸路につく、途中小休止、一同無事に大阪驛へついたのは背深いころであった。今回のこの大きな收獲のあった見學會を感謝しつつ解散。

この見學會のために岡山大學講師、齋藤孝先生が同行して下さり熱心に明確に御指導頂けたことを大變有難く深く感謝している。

又この見學會のために委員の方達のゆきとどいた配慮に厚く

三 河 紀 行

(堂友會四十七年度夏季見學旅行)

ことしは三河地方の文化財を主に、岡崎、伊良湖方面への見學會ということになった。前日までの長雨に加えて、數年ぶりの集中豪雨の報もあって、案じていたお天気も、この日は、雨具の心配もなく快晴。大阪驛西口に集合する會員五十四名。八時出發、車中で酒井委員より見學會行程等挨拶あり、おなじみの和やかな顔が揃う。バスは阪神高速、つづいて豊中インターより名神高速道路に入る。京都、伊吹あたりで少ししぐれ、大津、養老と、小休止ののち一宮インターを出る。一路大府、武豊とぬけて南知多へ。日本六古窯の一つ常滑の町へと向う。ひる少し前、常滑の陶磁器會館前に到着。タイル外装の美しい會館に入り晝食。澤田館長より常滑の陶器についての講話をうかがう。いまなお練瓦造りの四角い煙突が五百本も立っているという。この地方の土肌を生かし、鐵分を含んだ泥焼が、美事な朱泥を、誕生させたという。

そして土地の傾斜を利用してこの丘陵地に、上り窯造りが成ったという。規模と歴史の古さでは、今尚立派に高く評價されている常滑の陶藝である。室内には、大氣汚染判定機が、設置され、公宣への対策が考えられているのだろう。會館にて朱泥の茶器、花器等、各自購入、家づとのたのしさを、味わう。つづいて山の常滑陶藝研究所へと向う。本館、陳列室で、その

收藏する古瓶、古陶器、出土品の壺などつぶさに見學をする。

吉良町の金蓮寺へ。高い石段をのぼって、國寶の阿彌陀堂を見學、檜皮葺、寄棟、三間四方の堂宇で瀟灑な國寶建造物である。堂内に入り、岡大講師、齋藤孝先生の明解なお話をきく。

マバラ樺、二重折合、小組格天井等方形の造り。建具の變化等、徴に入り細に入つての解説に見學者一同満ち足りたおおいである。腕の減失している阿彌陀佛の白毫が光る。

つづいて渥美半島の先端、伊良湖岬へとむかう。夕おそく伊良湖國民宿舎に到着。めづらしい夕食をあわただしくすませて、各自、定められた部屋に落付く。廣々とした松林のしづけさの中に見學會第一日の夜をねむる。

翌九日朝八時半出發。月見草の咲く内海に沿って、バスは走る。車を駐めて、日出の石門を見學、波の浸蝕によって、出来たという石門に、自然の不思議さを感じ、朝かげの中に、ふかぶかと豊かな、目に沁む海の青さを眺める。

田原町の郷土史展示室に、華山文庫を見學。この地に生誕した、渡邊華山の、學者として、畫家としての徳をしのぶ。場内に展示された、書、畫、それに遺書、文獻等、いつまでも立ちつくし、その人となりをつぶさに回想したことであった。華山筆といわれる「報民倉」の大額が今尙あざやかである。その前庭の華山神社は、再建されてまだ日が新しい。

川田剛氏撰文の大頌徳碑の前に、忠孝兩全の人の遺徳を偲ぶ。額田町の天恩寺には重要文化財の佛殿、山門がある。寺内の寶物、書畫、香爐、それに徳川家の御朱印、山本梅逸の畫、山岡鐵舟の書など、得がたいものを拜觀させてもらう。探幽、若

仲の畫に、古代傳統の布地に驚嘆するばかりである。

春水四澤に滿ち夏雲奇峰多しの額が目につく。ここで素食。夏うぐひすが鳴く。

佛殿の様式は唐様の禪風である。須彌壇、脇壇の剛りが美事である、刻まれている蓮の花、葉等、説明をうかがう。山門は現存している藥醫門として最古のものだという。室町時代を表わす繪様、縁形などくわしく講話をきく。つづいて岡崎伊賀八幡へとむかう。本殿、拜殿等は江戸室町時代の建築である。隨身門の入母屋造り檜皮葺の均整が美しい層をみせている。

前庭の石橋は之亦重要文化財として指定されている。實に美しい形をしている。池の水蓮が見事に美しい花をつけている。

大樹寺へ行く。五重相傳の道場であり、松平家の菩提寺でもある。本堂の方丈には、大和繪の名手、冷泉爲恭の揮毫による襖繪が、五十面餘り、寺寶として保存されている。

巧妙な、いまなほ、鮮やかな色彩をのこして見事な筆致である。境内の多寶塔が美しい。屋根のそりに目を奪われ、水煙が陽に光っている。境内にある松平八代の墓が並ぶ、その形、大きさ等、各々の特色、時代を、考えてみる。

少し雨がパラパラしはじめた。一路歸途につく。九時半すぎ一同無事歸着、散會。

今度も又得がたい夏季見學會に参加することが出来て心あたたまるおもいである。殊に随時各所で、懇切丁寧に御指導、御説明を頂けた齋藤先生に厚くお禮申し上げたい。いつもの事乍らこの企畫を受持たれた委員の方達の蔭乍らの御配慮に深い感謝の思いをささげている。

(澤 美枝記)

(堂友會記事)

四十六年度「懷德」發行せず。

四十五年十月十七日 懷德堂恒祭に會員多數參列。

四十五年十一月十五日 秋季見學會を東山智積院養源院妙心院で行う、晩秋の東山の風物を心おきなく賞した。講師同志社大學山岡先生。

四十六年五月二十三日 岩佐進阡氏を講師として、高槻市の史蹟見學會をした、先ず慶瑞寺、普門寺の寶物を見學し、今城塚を視察して乾性寺伊勢寺などを見學した、殊に乾性寺では竹外藤井先生の遺墨などを拜見した、參加者四十餘名。

四十六年五月二十七日 千葉傳次君死亡。
同君は聽講生として永年來堂されたが、老衰のため死亡した、哀悼にたえない。

四十六年七月四日 仲田應弘氏より金壹萬圓受取る、維持會員に推す。

四十六年七月三日 岡山大學助教齊藤孝先生を講師として、吉備路の見學旅行を行う。邑久町の定光院で中食、講演をきき余慶寺の秘佛を拜觀して吉備津神社で昇殿參拜し、ついで岡山大學教授藤井駿先生の講話をきき神域を見學した後、雪舟莊と寶福寺に分宿し、翌四日高松最上稻荷に參拜、伊部町の木村興樂園で焼物を見、ついで、國寶閑谷學校を參觀して一路歸阪した、參加者八十餘名。

四十六年八月二十二日 有志者で阿倍野墓地の西村先生、誓願寺寶相寺神光寺などの先儒諸先生の展墓をした。

四十六年十月十六日 懷德堂恒祭に會員參列。

四十六年十月二十四日 京都大學助教淺尾先生の指導で、堺市南部の法道寺、櫻井神社、多治速比賣神社などを見學、參加者四十五名。

四十六年五月二十二日 楠本宗平君より金壹萬圓受取る、維持會員に推す。

四十六年十月八日 維持會員澤美枝女史より金壹萬圓の寄附を受く、厚意を謝す。

四十七年五月十四日 神光寺の石庵先生の畫像を見る。

四十七年五月二十六日 御堂恒祐君より金壹萬圓を受取る、維持會員に推す。

四十七年五月七日 岩淵賢治君より亡祖母七週忌志として金五千圓を頂く、御厚情を感謝し、冥福を祈ります。

四十七年六月四日 追手門學院大學講師千田稔先生の指導により、橿原市今井町及橿原考古研究所などを見學した、雨天にも拘らず參加者三十五名。

四十七年七月八、九日 夏季見學會として三河地方の旅をした先ず八日に常滑陶磁會館及陶磁器研究所を見學す、陶磁會館長の懇切な接待を請け感謝す、後金蓮寺の國寶阿彌陀堂を見伊良湖國民休暇村宿舎で宿泊、九日、日出の石門を見て華山會館に渡邉華山の忠誠を偲び遺物を見て天恩寺にて中食、寶物を見て伊賀八幡宮、大樹寺を見て歸阪した。

八月二十一日から二十六日まで、午後六時三十分より八時まで、夏季講座の試みを茶隴山道場で開く、本會會長大阪大學名譽教授木村英一先生の特別御出講により、論語の講習を受く、參加者延一五〇名、續講の希望があった。
(酒井)

會員動靜

死亡 千葉傳次

新會員

林 信夫	田中 嗣人	村田 仁
西崎 泰司	大塚 昌人	中村 吉延
桃 裕行	勝部 八重子	服部 幸雄
酒井 義雄	齊藤 フサ子	瀧 進
松原 秀明	北 規矩哉	神樂岡 昌俊
仲田 貞子	柏原 博子	日比 文子
松下 絢子	井口 久爾子	西村 俊一郎
勝本 幸子	龍村 徳	鈴木 登美
村山 淑山		

懷德堂堂友會會則

(昭和四十三年四月一日改正)

第一條

本會を懷德堂堂友會(略稱堂友會)と稱し、懷德堂聽講生並に懷德堂事業の共鳴者を以て組織する

第二條

本會は懷德堂の趣旨に遵い徳性の涵養、智識の向上及び堂友の親睦を圖るを以て目的とする

第三條

本會の事務所を豊中市待兼山町一番一號大阪大學學部内懷德堂事務連絡所内に置く

第四條

本會の目的達成のため左記行事を適宜催す

一、見學會

二、講演會、茶話會等の諸會合

三、雜誌『懷德』の發行(年刊)會員には無料頒布する

第五條

本會の會員種別を左の通りとする

一、名譽會員 懷德堂記念會役員、運営委員、講師等の中より推選する

一、維持會員 金一萬圓以上の寄附者(數回に寄附するも可)

一、正會員 會費年五百圓、但二百五十圓ずつ二回に分納するも差支えない

第六條

本會に會長一名、委員若干名を置き、會務一切を處理する

會長の任期は特に定めず、委員の任期は一ヶ年とし重任を妨げない

第七條

會長は名譽會員の推薦に基づき、本會が推戴する。委員は會長が指名する。委員中より會計一名を互選するものとする